

徐復観著作選訳注 (3)

— 評論編 I —

石川泰成・竹内和喜

解説

評論編の収載は「黄季剛先生について」「殷海光氏の思い出」「魯迅を哀しむ」「周恩来氏を悼念する」「劉少奇を哀しむ」の五編である。分量の関係から、次号とに分けて掲載することとするが、以下に各文章の主要人物について解説を施こそう。

黄侃、字は季剛。黄季剛に関して徐復観は「私の教員生活」の文章で語っている：「三千人を超える受験者で、黄先生が看られた私の答案は、頑固な先生によって第一位にとりあげられた。そして先生は武昌師範大学と中華大学での講義中に『わが湖北は満清一代において、ひとりの偉大な学者も出せなかったが、今日ひとりの優秀な青年をみいだした。それは我々と同じ黄州府の人である』と、私のことを学生に語られたそうである」。これは民国14年（1925年）、湖北省立武昌国学館の受験、徐復観23歳のときのエピソードである。この年の下期には経済的貧しさのために4カ月の小学校教員にあたり、この当時「季剛先生の言いつけで郝懿行の爾雅義疏証をしっかりと読んでいた」とある。

1903年生まれの徐復観に対して、1904年生まれの吉川幸次郎にも黄季剛に関する民国20年（1931年）留学時の事象が「南京懐旧絶句」の文章に見える。さらに黄先生に関して両者のたのしい会話が、徐復観1960年の訪日時の文章「京都の山川人物」にも見えている。

徐復観と自由主義者の殷海光は、殷の台湾大学哲学科に於ける学生の一人である王曉波の「私が影響を最も受けたのは殷海光、徐復観の両先生であった」（王曉波著—民族主義と民主化運動—）と言っているが、王氏に限らず当時の香港、台湾地域では殷、徐両氏が「両光」と並び称されていたように、学生や一般大衆に与えた影響は甚大であったと言える。同じく学生の一人である陳鼓応の編集した「殷海光最後のことば」には：「彼（徐復観）と唐君毅を比較した場合、唐氏の確立したのは人の鏡となる風格であり、功績は道徳的理想であり知識ではない。なぜなら唐氏には古い歴史的な重荷が多く、わが民族中心主義から出て、道徳的な思考に夢中になっているから、

中国の歴史、社会文化の真相について明確にはできないのであり、才能も不足している。しかし徐氏には古い重荷はことごとく打ち捨て、現実をとらえて経験の世界を透視しているから知識的に功績があるのであろう」と殷海光の評語がある。

学生の一人であった李敖の文章「我が殷海光」には：「国民党は大陸での失敗から台湾に逃亡した後、その失敗の原因を検討して二つに分類した。一には独裁制が不足していたから、今後一層独裁的であるべきであると言うこと。もう一には民主化が不足していたのであり、今後は古い習わしを捨て去り、しっかりと進歩的な反省をするべきである」と言うのである。だが後者タイプの反省者は極めて少ないなか、最も成功したのが殷海光である。この反省の成功には二つに条件があり、その一には知識が必要であること。二には政治的野心がないことである。知識があつてこそ世界の流れは防ぎようがなく、民主化が必要なことを理解できるのである。政治的な野心がなくではじめて理想主義的な標準を維持できるのであり、民主化を政治的地位の獲得の手段にしてはならず、一種の目的にすべきである。私は二つの条件が最も殷海光に備わっておるから、反省が最も成功しているのであり、それは雑誌『自由中国』に発表された文章で特に際立っている。反面この成功とは、国民党から見れば彼ら自身の失敗であり、彼らの集団から出た反徒であるばかりか、何もかも兼ねて力量を備えた反徒なのである。彼らは痛心のあまり、忠党の問題まで持ち出して見苦しさを引き出している」と言っている。

台湾の民主化運動と台湾大学哲学科を中心とした学生の育成に多大な足跡を残した殷海光、亡くなるまでの数年間、政治的な圧力を受け、哲学科の席はあつても教壇に立てない状況にあった。前回収載の「偉大なる書生の悲劇」で徐復観は：「私は真の自由民主が実現するまでは、すべての書生は悲劇的運命にあると深く理解している」と言っているが、如何なる民族、如何なる国家、さらに現代中国史に限定されず、殷海光もまた悲劇的運命の一書生であったと言わねばならない。(現在台湾大学出版センターから「殷海光全集21巻」が出版されている)。

徐復観にはこの文章「魯迅を哀しむ」以外に「魯迅を語る」がある。そこには徐復観が「魯迅ファン」になった経緯が書かれてあり：「1928年3月日本に行き、翌年春に河上肇の『経済学大綱』を読み始めて、両者を比較してみれば、私にとって魯迅の重さは明らかに軽すぎた」とある。それに1960年に訪日して香港華僑日報に載せた文章「外来語から見た日本知識人の性格」には：「戦時下の日本では狂乱的心理で中国を侵害して、中国文化の若干の研究をなしたのだが、この種の仕事はその動機が不純であるから、学術上の結果が得られないのは言うまでもない。戦後、中国文化に対する態度はすっかり冷淡になっている。しかし、各大学ではほとんど『魯迅研究会』ができていて、魯迅の地位がすべての中国文化に取って替わっている。過去の日本ではどうして徹底して中国

文化を受容したのか？何故なら中国は『大』であるから。現在、魯迅の地位は日本の知識人の認識においてどうしてこのように高いのか？なぜなら中共が魯迅を奨励しているからであり、中共は日本人の認識では相変わらず『大』なのである。もしも中共が突然魯迅を清算して、あっという間に胡風を担げば、恐らく日本人はすぐさま魯迅研究会を胡風研究会に換えるであろう」と日本人を皮肉っている。中国の徐復觀研究者は例外なく識っているが、徐復觀の生前には健康問題で実現こそしなかったが、鄧小平は廖承志を派遣して徐復觀を北京に招待している。日本の研究者は政治的な立場の相違だけで、徐復觀を見てはいけぬ。また大陸が胡適を否定すれば、日本もまた胡適を否定し、大陸が再評価すれば、日本もまた再評価するようであってはいけぬ。

次に「周恩来氏を悼念する」と「劉少奇を哀しむ」について。周恩来や毛沢東を始めとする中共に関する政論が、1980年に台北の時報出版社から出版された「徐復觀雜文1－中共を論ず」に、ある程度まとめられている。その中の「大陸の政局に関して」の文章には「全世界で周恩来だけが最も毛沢東を理解している。それは『遺体は火葬にして、その骨灰は祖国の江河大地に散くように』とある遺言が、その最たる証明である」（大陸の政局に関して）と言ひ、続けて毛沢東の鬭争を分析している。

徐復觀の延安時代、徐復觀は毛沢東の紹介で劉少奇とは一度面談しているが「当時は劉に対して少しの好感ももてなかった」と言っている。反面、毛沢東には好印象をもち、親しく五回以上の長話の機会をえており、徐：「どのように歴史は読むべきでしょうか？」、毛：「中国史は興亡の境目を特に留意すべきだし、この時期にこそ問題が容易に見てとれ、逆に太平の時代には難しいのです。西洋史ではフランス革命を特に注意すべきです」。徐：「孔子のことばに賛同するものはありませんか？」、毛は目をクルクル回して：「あります。博学之、審問之、慎思之、明辯之、篤行之。これはとても好いことばです」（中庸第二十章）等の会話が續いている。

そして言う：「1943年秋、私は延安から重慶に戻り、蔣（介石）先生に『若し国民党がこのようにいけば、中共には全面的な政權をとる力があります』と報告した。私は毛のやり方が成功したのだと認め、心のうちではとても感服したのであった。だが文革以来、この気持ちも日一日と無くなり、行きすぎた鬭争好みや權術の愛好者たる彼が惜しまれるのである」（中共問題の断層）。

徐復觀の政論と雜文を含めた學問とは、耿波氏の著書「徐復觀—心性と芸術思想の研究—」が牟宗三のことば（徐復觀先生の學術思想）：「このような大時代に於いて、徐先生は『参与者』の身分であり、私は直接の参加經驗をもたない、単なる『傍觀者』である」を引用して、非常に見地ある断定のことばだと言うが、これは的を得ていると考える。同じ大時代を生きた牟宗三のことばは重い。（竹内和喜）

魯迅を哀しむ

(一)

大陸の文化大革命では、毛沢東が1930年代の文化的功臣をみな清算してしまったので、台湾の新聞の文化欄では30年代の上海を中心とした文化人をよくとりあげ、何度となく特別に魯迅をとりあげている。民国16年（1927年）から18年にかけて、私は魯迅に夢中であったが、この後は日本の経済学者河上肇に夢中になって、しだいに魯迅のことを忘れてしまった。今回来港して、いつも床についてから魯迅の作品を随意に読んでみて、三十年前とは違った感想を覚えるのである。

学術思想の立場から語るなら、魯迅の一生は三段階に分けることができる。五四運動以前が第一段階であり、それはちょうど蔡元培⁽¹⁾ 先生が「魯迅全集序」で述べているように：「清代学者の影響を受けて、いろいろと会稽郡故書を収集し、嵇康集の校訂、謝承の後漢書の編集、漢の碑帖、六朝の墓誌目録、六朝造像目録を切り開いた」、である。この段階で彼が最も影響を受けたのは、もちろん章太炎⁽²⁾ 先生である。後の「中国小説史略」はしっかりとした著作であり、たしかにこの段階の学術訓練の影響を受けている。つまり彼が後に人と論争した雑文の多くは、ほぼつぼが押さえてあり、極めて虚辞浮説は少ない。これはもともと文学的な天性から出たものであろうが、やはりこの段階の学術訓練と関係していると考えられる。惜しくは章先生が訓詁学から義理の学に至ったのは晩年であり、先生が東京で魯迅に教授したのは小学声韻に限られるからである。しかし魯迅と同時期に教えを受けた許壽裳⁽³⁾ 先生の章先生について：「学術の大きさは、これまでに無かったような人であった」と言っているが、このことばからみれば、彼たちは当時小学声韻以外に、まだ聖賢之学があることを知らなかったのである。これはつまり魯迅の一生における、中国文化に対する理解が限定されているということである。

(二)

民国5年、新青年に「魯迅」の筆名で発表した「狂人日記」以来、民国19年に全国指名手配を受けるまでが、魯迅の第二段階である。そしてこの第二段階は前後の二つの小段階に分けることができる。その前一段階は主に「呐喊」「彷徨」等の短編小説で、社会のいろいろな重い病状を暴露している。後一段階は主に「熱風」などの雑文で政治、社会の色々な現実から具体的な問題をそしり糾弾している。

民国19年春から「下劣な文人」の罪名で政府の指名手配を受けてから、25年10月

19日の死までが第三段階である。この段階ではさらに時事を糾弾する雑文が中心である。しかし第二段階では自由精神に富んだだけの作家であったのに、この段階ではあきらかに共産党員として、たえまなく自己に無産階級意識をうえつけ、文学の無産階級的立場に固守して、至れり尽くせりのソ連防衛者になっている。彼はこの段階で次世代の青年に希望をみいだしながら、労働者、農民大衆が得るところの形象に転換している。だがひとりの文学者としていえば、共産党員になってからはすでに寿命がおわっているのである。共産党が文学者を利用する時には、すでに文学創作に不可欠な自由な活動精神を幾重にもはく奪して、最後には闘争で清算されるような結束をみるのである。魯迅は中国のゴリキーだと中共にかつがれているが、若しゴリキーが亡くなっていなければ、スターリンの魔の手を逃れられたであろうか？魯迅が亡くなっていなければ、胡風⁽⁴⁾たちと同じ運命から逃げおおせたのであろうか？

少し簡単な例をあげてみよう。魯迅が「辱罵と脅かしは決して戦闘ではない」⁽⁵⁾の文章で、当時の左派の文人について「あたかも罵りが多ければ多いほどプロレタリア作品のように思っている。だが良好な労働者や農民は、口からでまかせに人をのしらない人も多く、たとえ人をのしるのを好むプロレタリアートがいても、それは悪い癖があるというだけの話である……決してこれより広げてはならず、将来のプロレタリア社会では一言も合わなくても、先祖三代に罵られてどうしようもないであろう」。しかし毛沢東は自身の老同志を叩きのめすのに、もっともあくどく誹謗し辱罵する方法さえ惜しまなく、それは劉少奇⁽⁶⁾たちの今日の遭遇をみればわかる。魯迅が健在ならどのような態度をとり、そして自身を全うすることができたのであろうか？

（三）

中国の長期の専制的統治下では、小役人と地主や有力者が結託して遅れた農村社会を支配してきた。さらに長期の空虚な科挙制度が社会の知識人を無知識、無品格におとしめ、農村に文化の光があたるのを阻害してきたのである。魯迅はまずこのような社会の暗闇を深くよく練った文字で叫びあげたのだが、これは実に人としてもつべき使命感であるし、同時に社会の進歩を促進させる原動力でもある。この点から言えば、もちろん魯迅の貢献は永垂不朽である。

しかしながら彼らが把握する人物像には悲惨性や暗黒性があるけれども、実際には頑強さや光明さの一面もある。例えば「孔乙己」、「單四嫂」などから分析してみれば、その悲惨、暗闇のなかには隠せないような彼たちの一面をもみいだすことができる。私はパールバックの作品を改編した映画「龍種」をみたけれども、そこには我が国の農民がはっきり描かれているし、それが「愚昧で偉大」な人民なのである。しかし魯

迅はこの二面の真実を、方向を変えた一面に発展させている。もちろん彼はここから中国文化の潜在力をみることはできない。魯迅が呪う伝統文化は六十年代になれば、逆に三十年代作家の精神的護符になっている。そして当時の魯迅は中国にとっての唯一の救い神はソ連だとしているが、今日では中国にとって最大の仇敵になっている。魯迅がああ世からみれば、どう思うのであろうか？

魯迅の弱点としては名声を得たのち「自己保護」が過ぎることであり、小さなことでも目くじらを立て、争うことである。これは彼の後期における感受性と視野に影響を与え、精神を絶え間なく萎縮させているのである。

魯迅に決定的な影響を与えたのは共産党加入である。しかし当時の文化政策にわずかな知恵があるなら、ひとりの作家を指名手配にしたりはしないし、有頂天時の「好き勝手」にさせておけば、魯迅は決して共産党には加入していないと私は推測する。最近、ソ連はスターリンの娘の公民権を取り消したが、スターリンの娘は逆にこれを喜んでいるくらいである。これは彼女がとっくにソ連とは縁切りをしていたという反映である。だが魯迅の自己が指名手配されてからの状況はどうであろうか？許壽裳「亡友魯迅印象記」⁽⁷⁾の記載によると、魯迅はまず「自由大同盟」は「決して私が発起したのではない」と言っている。「浙江省黨部に私の親しい知り合いがいて、彼らが思いがけなく声をかけてくれて、私は事のいきさつを話したのである。いま意外にも突然にこの手段をとるのであれば、私はしっかり対処するだけであり、決して声明はださなくとも、私から発起したようにすればよい」、また：「私が糾弾しているのは社会上さまざまな暗闇であり、特別に国民党に対したのではない。この暗闇とはその根源が一、二千年前のものや、数百年あるいは十年前のものである。だが国民党の執政以来、まだそれが根絶されていないのである。現在彼らは私に発言を許さず、まるで上下数千年すべての暗闇を、意を決して庇護しているようである」。魯迅は国民党との敵対を伝えているのであろうか？積極的には批評が利用できないことで、改善の力量としているのであり、消極的には容認して敵を退治するのができないのである。悲しむべきなのは魯迅ひとりではないであろう。⁽⁸⁾

注

- (1) 蔡元培：1883年～1948年、中華民国期の教育者、政治家。浙江省紹興人。23歳で科挙に合格し、07年、ドイツに留学する。17年、北京大学校長に就任し、胡適、陳独秀、李大釗らを招き、同大学を新文化運動の中心地に築いた。
- (2) 章太炎：1869年～1936年、太炎は章炳麟の号である。清末から民国期の民族革命思想家、政治活動家、国学者である。浙江省余杭人。
- (3) 許壽裳：1883年～1948年、浙江省紹興人。1902年日本へ留学する。弘文学院から東京高等師範学校に進

み、1908年3月卒業。弘文学院速成普通科時に、同郷の周樹人（後の魯迅）と結識する。辛亥革命後、蔡元培の要請で教育部行政に従事し、北京女子高等師範学校校長、中山大学教授他の要職を歴任する。抗戦勝利後、台湾省行政長官公署長官である同郷の老友陳儀の要請を受け、台湾省編訳館館長、台湾大学中国文学科教授兼学科長職に就くが、1948年2月18日深夜、大学宿舎で殺害され65歳の生涯を終えた。殺害に関しては、戴国輝著の『台湾』（岩波書店、1988年10月）及び『許壽裳-台湾時代文集-』（国立台湾大学出版センター、2010年11月、黄英哲編）、「許壽裳日記-1940~1948-」（同上、北岡正子他編）に言及がある。

- (4) 胡風：1902年～1985年、文芸評論家、詩人。湖北省蕪湖出身。本名は張光人、1929年日本に留学し、慶大英文科に学ぶ。後に中国左翼作家連盟に加入し晩年の魯迅と交わるが、「国防文学」を主張する周揚ら黨員グループと対立する。1955年「胡風反革命集団」の頭目として逮捕投獄される。
- (5) 南腔北調集の「辱罵和恐嚇決不是戰鬥」——致《文学月報》編輯的一封信。
- (6) 劉少奇：1898年～1969年、政治家、国家主席。湖南省寧郷出身。政策路線の相違により毛沢東と対立し、68年10月8期12中全会で党籍永久剥奪され、河南省開封で病死する。
- (7) 亡友魯迅印象記：峨嵋出版社（上海）1947年出版の「上海生活1927—前五年（1927—1931）」P.91～92にみえる。魯迅に関して、許氏には上記の他「我所認識的魯迅」人民文学出版社（1953年北京。1978年北京）、「魯迅的思想與生活」（楊雲萍編1947年6月台湾文化協進会）の著書がある。
- (8) 初出は、一九七〇年二月二十三日「華僑日報」、この項の訳注は竹内和喜が担当した。

周恩来氏を哀悼する

周恩来氏が亡くなってしまった！私には彼を哀悼する理由も、資格もない。しかし、新聞紙上で彼の死去のニュースを目にした時、やはり熱涙があふれ、何を語ればよいかわからない！

昨日（八日）午前十時ころ、電話工がわが家にやって来て電話機の点検作業をしながら、私とよもやま話をしたのだった。彼は無邪気にも自身の愛国的熱情と政治的見解を披露してくれた。結論としては：「もし毛が周より先に亡くなれば、我が国は安泰です。だが周が毛より先に亡くなるようだと、こりゃたいへんです」と言い、周には重い病気などはなく、ただ病院でしばらく情勢を避けているだけだと信じて疑わないのだった。当時私はひとりの若い作業員が天下国家を分析する能力を持ち合わせているなど、我々の国は立派だと思った。反面この電話工が周氏は死なないと固く信じて疑わないころ、新聞紙上ではちょうど亡くなったと報道されたのであった。もし黄克強⁽¹⁾、蔡松坡⁽²⁾、宋教仁⁽³⁾氏等が20年長く生きていれば、或いは孫中山先生が8年でも、10年でも長く生きていれば中国の情勢はどうなったのか、誰にも推断はできないのである。歴史とは人間が作りあげるものであり、特に傑出した人物の生死が歴史に深くかかわること、それは断定できる。

私が初めて周氏にあった時期と状況は、まったく憶えていない。対日抗戦の時期、黄季寛⁽⁴⁾氏に従って山西省の作戦に参加したのだが、かつて黄氏は湖北省の行政幹部訓練団の2000名を山西省に移して戦地幹部訓練団を作り、私に教育長をさせ、周氏を政治教官に推薦する計画をもっていたのであるが、この計画は作戦の失敗があまりにも速すぎて、実現しなかったのである。だが石家荘か太原で周氏とはすでに面識を得ているはずであり、お互いには好印象であったと想像できる。

周氏との対面が最も多かったのは、当然1943年であり、私が軍司令部から連絡参謀として延安に派遣されているところのことである。周はもともと重慶に長期滞在の予定であったが、1943年に中共内部で整風運動が発動されたため、この年のおよそ5月か6月には延安に戻っているであろうし、たびたび宿舎の私を訪ねてくれた。問題点を語れば、彼はいつも情理に通じて委曲を尽くし、決して各人の基本的立場を犯すようなことはなかった。国民政府の主席であった林森が亡くなり、延安は追悼会を開いて、呉玉章⁽⁵⁾が追悼辞を述べたのであるが、この時、呉は口汚く蔣（介石）氏を罵つたから、私はすぐさま退席して、そのうえ絶食して抗議をしたのである。周氏はまず長い手紙を私に寄こし、説明をして遺憾の意を表明してくれたばかりか、すぐさま足を運んでなだめてくれたのである。つまり、彼との接触では政治的立場のほか、あたかも一種の「人間的な立場」があったように感じた。そしてこれは共産党員のなかでは、容易に探し出せるものではなかった。

私は香港に来てから、いろいろと細々しい話を耳のするのであるが、例えば齊白石⁽⁶⁾に手配をつけてくれたり、文革中の紅衛兵が章行巖⁽⁷⁾を襲った時、周がいかにか方法を講じて緊急に救助したか、ひいては或る人が大陸を離れたくも離れられない時、周を訪ねれば、周はいつもこのような人の手伝いをしてやるのである。これらはほんのわずかで取るに足らないことであろうが、やはり些細なことがらであっても、その「人間的な立場」から流れ出た情である。人間の世界では、こういった「情」は極めて珍重すべきものである。

私はかつて周は政治的才能で、ただ毛路線に従い、決して自分から先頭に立つようなことはせず、非常な危険の中でも自身の地位を保ったと言ったことがある。私は延安において劉少奇と会ったことがある。彼についての印象は無いが、文革で公表された彼の罪状からは、すばらしい人物であることに気づいた。文革以来、多くの人が訳のわからないことを言ったけれども、こういったことで周氏の口から出たものは、極めて少ないであろう。批孔運動で江青たちが「巧妙な偽人」と周氏を皮肉って攻撃したが、この攻撃の中においてさえ、彼が毛の傲慢横暴な権威のもとで、実に多くを調停したり、守り立てたりに尽力してくれていることから見ても、中共政権がどれだけ

彼に支えられていたのかは推断できるのである。私は「調停頭白范純仁」⁽⁸⁾の詩句を思うたびに、いつも彼を悲しむのである。

癌は一種の不治の病である。周の境遇でこうした不治の病を患うのはしかたがないことであり、これで亡くなれば死後の榮譽に浴しても、彼にとっては大きな幸福だとは言い切れない。彼の死によって、中共の内部では力の均衡が失われるばかりか、国際的な威望と信用にも影響を及ぼし、なんの知識もない江青たちが、さらに好き勝手にふるまうであろう。これは私のような共産党に反対する人間にとっても、国家の前途を思えば痛惜せずにはいられない。⁽⁹⁾

注

- (1) 黄克強：克強は黄興の字である。1874年～1916年、湖南省長沙府出身、清末民国初期の革命家、政治家。中華民国開国の元勳の一人であり、当時「孫黄」と並び称された。
- (2) 蔡松坡：松坡は蔡鍔の字である。1882年～1916年、湖南省宝慶府出身、清末民国初期の政治家、軍事家。辛亥革命に鼓応し、後に袁世凱の帝制に反対して護国戦争に参加した。結核病を患い、1916年11月九州帝大医科大学付属病院で亡くなる。
- (3) 宋教仁：1882年～1813年、清末民国初期の革命運動家、政治家。湖南省桃源県出身。議院内閣制の確立を主張して、中華民国大總統に就任した袁世凱と対立し、袁の放った刺客によって上海北駅で暗殺された。
- (4) 黄季寛：季寛は黄紹竑の字である。1895年～1966年、廣西省容県出身。保定軍官学校卒業であり白崇禧とは同学であった軍人政治家。1949年3月李宗仁代理総統就任時には国民党中央政治会議委員として国民政府和談の代表であった。政協全国委員会委員。1966年、病を得て北京で亡くなった。
- (5) 呉玉章：1878年～1966年、四川省榮県出身。1905年中国同盟会に加入し、孫中山の革命運動に従事する。ロシア10月革命や五四運動の影響を受けて、1925年、中国共産党に入党した革命家であり、教育家である。文字改革運動の指導者であった。
- (6) 齊白石：1864年～1957年、湖南省湘潭出身。貧農の子として生まれ、木匠出身の人民芸術家として毛沢東に気に入られ、50年、毛のために「鷹図」をおくっている。
- (7) 章行巖：行巖は章士釗の字である。1881年～1973年。湖南省長沙出身、古典研究者としても有名な清朝末民国初期の革命家であり無党派人士。1903年蔡元培らの組織した軍国民教育界に参加後、日本と英国に留学する。49年国共和平協議調印を拒否する国民党を非難する。全国政協常務委員、全人代常務委員、中央文史研究館長などを歴任し、73年肺炎と心臓病を併発し、92歳、香港でなくなる。
- (8) 調停頭白范純仁：張之洞の詩「漩宮憂国動霑巾，朝士翻爭舊與新，門戶都忘心胆事，調停頭白范純仁」にみえる。
- (9) 初出は、「華僑日報」一九七六年一月十日、この項の訳注は竹内和喜が担当した。

劉少奇を哀しむ

(一)

今回、中共の思想大整肅の運動中、意外に思ったのは劉少奇が党内で反毛沢東思想の大将であり、毛沢東による整肅の一番手の対象であったことだ。劉少奇は中共党内においてナンバー2であり、かつて毛沢東は彼を継承人に指名したことがあった。本月（8月）18日北京での100万人大衆大会では、ナンバー2の彼は林彪にとって代われ、ナンバー8まで落とされてしまった。そして中共の「八届十一中全会」、その8月8日に決議された〈無産階級の文化大革命に関する決定〉によると、彼が整肅された事情がはっきりと理解できる。

この〈決定〉の第一では、彼らは今次の整肅の五大目標を説明しているが、第一の目標は「資本主義の道を歩む実権派を打倒する」である。「実権派」とは中共党内の権力を支配する、この一派の指導者とは毛沢東を除けば、劉少奇しかいないのである。この整肅運動の最終目標は劉少奇であることからして、去年11月以来多くの共産党の慣例に違反する現象が説明できるのである。第一、どうして軍事的反抗の発生を叫ぶのか？ 第二、どうして党で軍を統括せずに、軍で党を統括するのか？ 第三、どうして〈人民日報〉は長期にわたって、任務を受けても行動を起こさないのか？ 第四、どうして各級の党部、各種の宣伝文化機関が整肅される対象になっているのか？ あるいは動かされる地位に置かれているのか？ そしてこれは彭真⁽¹⁾や陸定一⁽²⁾の輩が引き起こせ得るものではなく、実際に劉少奇は毛沢東に打倒されたのである。

(二)

対日抗戦の時期、中共は重慶で《群衆》という刊行物を出していた。およそ民国28年のある一期であったが、そこに劉少奇の文章《共産党員の修養を論じる》がみえていた。それは主に国際無産階級の立場のものであったが、中には人格の本質の問題に迫ったものもあり、部分的には《論語》《孟子》のことばを引用していて、作者の相当に高い文化水準が表れていた。民国31年、私が延安にいた頃⁽³⁾、毛沢東は私に《整風文献》1冊をくれたのだが、そこには劉少奇のこの文章は入っていなかった。ある日、毛は私に：「徐さん、我々のあの中には、よいものはありましたか？」とたずねた。私は：「ありますよ」、毛：「どの文章ですか？」、私：「劉少奇さんの文章です」。当時の毛沢東は当然現在とは違って、私のことばに耳を貸してくれていたから、驚喜した表情で：「どの文章がよろしいか？彼はここにいるから、明日あなたに会わせましょう」と。翌日やはり劉少奇は私を宿舎にたずねてくれた。痩せた体に無口であった。互いにとりつく

ろったような話で何もなく、よもやま話さえ何も覚えていないくらいであった。当時私はまだ彼の中共における地位を知らなかったのだが、後に注意していると、彼は理論と組織上の重鎮であったし、毛沢東の前での重さは周恩来よりはずつと上であった。今日毛沢東自らの手によって打倒されたのだが、これは毛沢東にとって彭（徳懐）⁽⁴⁾、黄（克誠）⁽⁵⁾ 事件よりもっと悲しむべきであるし、ひどすぎるのである。そして私にとっても人の世が夢のように、幻のような一種の不思議な気持ちにとらわれるのである。

（三）

中共今次の〈決定〉で毛沢東が劉少奇を筆頭とした権力派を、悪辣な手段で打倒したことがわかる。それに今次「全会」の〈公報〉ではこの整肅に毛沢東が実際に四年もかけて準備していたことが理解できる。昨年の11月、姚文元⁽⁶⁾が吳晗⁽⁷⁾の《海瑞罷官》を清算してこの問題が表面化した時期とは、相も変わらず点火的な探索的な形式をとっているのである。これ以前に毛沢東は秘密裏に布石を打っており、劉少奇たちの警戒心を麻痺させるのに、外国人との会見を惜しまずにこなしたり、ほどなく死んでしまうような装いをつくって自分が死ぬ準備の空気を放っているばかりか、甚だしくは将来中国の人民は必ずしも共産主義を必要としないなどと言っている。今ではこれは完全に自己隠蔽であり、敵をさらけ出す戦術であったことがわかる。しかし昨年11月以前では、毛沢東がいったい何をしていたのか？この点の解答について、まず下記する二つの問題をみよう。

上記の〈決定〉の第四項「大衆の運動中における自己教育」では「無産階級の大革命では大衆が自己の手で自らを解放する以外、如何なる方法も引き受けることはできない。大衆を信頼するには大衆の創造性を尊重すべきである」。共産党について少しでも常識のある人であれば、彼らが決して大衆の「しっぼ」にはならないこと、決して「なすがまま」の大衆活動はさせないことは理解できる。特にその政権範囲内では、大衆は単なる党のイエスマンであり、そうでなければ政権は大衆運動で台無しになってしまうであろう。そうであれば上記の「大衆が自己の手で自らを解放する以外、如何なる方法も引き受けることはできない」の語は、だれに聞かせるのであろうか？こうである以上、どうして北京大学をはじめ、重要大学の「グループ」を直接派遣して代理をさせているのか？以上がその一である。

上述した〈決定〉の第七項「ある者が革命的な大衆を反革命にするのを警戒する」で「ある一部の学校、組織、作業チームの責任者は、壁新聞を張り出してくれるし大衆に反撃する」。「そのうえ反党、反社会主義の右傾分子が大衆運動のある欠点と間違いを利用して、デマを飛ばして扇動したり、故意に一部の大衆を反革命にしてしまうの

である」「大衆間や学生間の闘争を煽ったりするような、如何なる口実も許さない」。この語は彼ら自身、内部のひどい混乱を反映している以外に、中共内部における二つの大衆運動系統の存在を述べている。鉄の規律による統治下、二つの大衆運動の系統は、いったいどこから出てきているのか？これがその二である。

(四)

私の上述した問題の解釈は、中共の党の組織は劉少奇を始めとして、ほとんどが反毛沢東思想であるとしている。毛沢東はどんでん返しをしたいばかりに林彪⁽⁸⁾を鼓動して、武力を借りたのである。しかし武力は各級党部の側面を威嚇するだけであり、反抗させないだけで直接手をだして対処するものではない。そこで毛沢東は四年の時間内に軍事という巨大な組織を抛り所にして（民兵を含めて）、彼の党系統以外に、密かに大衆運動の系統を広く配置したのである。この秘密裏の配置は去年に至ってようやく成熟したのであり、毛沢東はこの系統の大衆勢力を利用して、彼に反対する党の勢力に対抗したのである。毛は：「大衆だからこそ自己で自己を解放することができる」と言っているが、これは彼の配置した新大衆系統の自由行動を指すのであり、党の組織系統に指導させないためである。これがつまり「他人に替わってなすような方法はどのようであってもとらない」である。大学では軍事系統の力量は比較的薄弱であり、毛沢東の新部署も薄弱であってはならないので、「言うことだけで実行が伴わない」であって外部から小グループを派遣して、他人に替わってなす方法をとらせたのである。

共産党組織の特性の一つとして、本来大衆運動とは不可分なものであり、中共の党組織系統とは自身の大衆運動系統でもある。劉少奇の実権派は警戒を怠り、武力に怯えたため、毛沢東が秘密裏に配置した大衆運動に不意打ちを食らったのである。しかしこの不意打ちは党系統の大衆を完全に打ちすえたものではなく、当然彼たちにはまだ反撃する能力があったはずである。この能力とは武力系統があまり浸透していない各大学や中高校では強力に働いたであろう。このように党組織系統の大衆が現れれば、武力系統の大衆と対立や闘争が起きているのである。〈決定〉の第七項が指摘する状況はこのような推断で解釈することができる。

(五)

〈決定〉と〈声明〉の内容から見れば、毛沢東は林彪を運用した「事後承諾」的な勝利である。事後承諾とは毛がまず後方に隠れて武力と大衆の力で彼らの党組織系統を打ち破り、そして党中央の追認を強いて合法的な地位を得たのである。これは毛が自分自身の党と政府に対して実行した革命であり政変である。周恩来が自身を保全で

きたのは郭沫若⁽⁹⁾と同様に情勢をみて機敏に動いたからである。民国31年、周恩来は重慶から延安に戻って来た。そして私に会いに来たけれども、この時私は何のために戻ってきたのだとたずねたのだ。すると彼は驚いて目玉をくるくる回し、かいつまんだように「私は毛主席の学生になるために戻ったのです」と答えたのだが、私はいささか悲哀をおぼえたのだった。いったい何の魔力が現実の権威に立ち向かう勇気をもった、共産党人にこのような理性に欠けた卑しむべき言動をとらせるのか？まさか毛沢東だけに脳味噌があって、彼だけにしかマルクス、レーニン主義は理解できなく、他の人はみな無感覚な頭しかないから、毛に寄りかからねばならないのであろうか？周恩来が自らの保全にする「毛主席の学生になる」は宝物に他ならないのであり、誰と誰が闘うなどと言えるのか？

しかし、毛沢東は決して完全な勝利をおさめたのではなく、また徹底した勝利を得てはいない。毛沢東が「北京」に戻って姿を現して以来、中共のラジオ放送や新聞紙上の言葉や文字では古今東西のへつらいの言葉を使い尽きるように、そのうえこうした言葉を製造させる集団的な天才であり、まさにそれは毛沢東の狂った心理が要求したものである。一群の魔術師たちが狂ったように護符を唱える時、誰かでも彼たちが唱える護符に「不」が許されるのか？毛沢東が要求する「全国は人民解放軍に学ぶ」とは「工場、農村、学校、商行、サービス業、党や行政組織」等はみな人民解放軍と「革命化の大学校にする」ということである（以上は彼らの〈声明〉に見える）。つまり命令に服従しかない大兵營に変わった時、誰かが命令系統以外の意見をもつことが許されるであろうか？〈決定〉と〈声明〉では党内を左派と右派に分けて、「断固として革命的左派を頼りとする」といい、右派分子を「打ち倒して、崩壊させ、立ち上がれないようにする」と言っている。もし彼らが党内で毛沢東と違う意見を持つならば、それは間違いなく右派の意見であり、彼らにはまだ残るのが許されるであろうか？だが〈決定〉の第六項では、以外にも少数を保護するとあり、時に真理と言うものは少数者にあるからである。たとえ少数者の意見が間違いであっても、彼らの積明を許可するなり、彼らが自己の意見を保留することを応諾せねばならない。革命者とは独立思考にたけているから、特に思考し、発言し、行動を発揮するのが「共産主義的風格」であるとしている。この一節と目下毛沢東がとる一連の行動には矛盾があるのではないか！この矛盾の出現はこの〈決定〉中で言っている少数であり、実際には劉少奇を首謀者とする多数なのである。劉少奇の実権派は不意打ちを食らっても、まだこの数句の中に反抗力を表現して、それを彼らの反抗の拠点として保ちながら捲土重来を計っている。つまりこれは劉少奇が現在つぶれても倒れなく、まだ公に顔を出せる原因でもある。

(六)

〈決定〉でさらけ出した反抗の拠点は毛沢東にとって大きな威嚇であり、決して毛沢東が耐えられるものではない。よって8月12日に可決された〈声明〉では、上記したこの部分の意義を完全に抹殺している。これは8月8日に可決された〈決定〉について、毛沢東がやめようとしなかったのであり、9日以後に大衆と会見するような方式で思い切って闘わせるのを力づけているのである。この〈決定〉中の第6項と第7項（学校に対して「一律にしない」という部分）、第12項（科学技術者への譲歩）等、各譲歩した部分への反撃である。これが大衆紙に載れば、またもや撤回して取り消し、取り消し後にまたもや改めて出している。これは〈決定〉中の上述した部分に展開された激しい闘争の反映であり、それをとりまとめたものだと私は判断している。この闘争では武力を後ろ盾にして毛沢東は勝利を収めたけれども、党における真の多数から得た勝利ではなく、武力で党に対処した勝利である。中共の党とは現在まで、まったく毛沢東の敵なのである。

よって毛沢東が続けた作業とは、つまり彼らの党に対する全面的な変更である。この変更とは党内の左派が右派にとって変わるものではなく、なぜなら反毛沢東思想の趨勢下で左派の勢力は決して充分ではなかったのである。〈決定〉第9項の「文化革命小グループ、文化革命委員会、文化革命代表大会とは臨時的な組織ではなく、長期的に常設すべき大衆組織である」の言葉からみれば、これは毛沢東が「文化大革命」を彼の党の下に置くのではなく、今回彼が秘密裡に配置した大衆組織であり、劉少奇を頭とする現有の党組織系統に取り変わるようにしたものである。このようであって初めて現在の実権派を完全に潰せるのであり、劉少奇や多少知識、人格のある共産党幹部はその時になって徹底的に静粛されるのである。

上述した分析によると、中共内部の闘争とは正に全党あげての重大な展開である。そしてこれはスターリンがソ連で実行した静粛運動よりずっと広範囲である。この広範囲な闘争の過程中、その内部は間違いなく混乱状態であるから、〈声明〉の中では再三「騒乱を恐れるな」と強調しているのである。毛沢東は目下共産党組織系統の前に裸をさらけだし、武力に頼って内外の局面に持ちこたえているだけである。毛は元々が「武力主義者」である。中共の党は毛沢東の前につぶれるのか？あるいは毛沢東が彼の党の前につぶれるのか？現在はまだ断定はできない。しかし毛沢東とスターリンは同じ運命であり、林彪とベリアは同じ運命であると断言できるのである。⁽¹⁰⁾

注

(1) 彭真：1902年～1997年、山西省曲沃出身。文革以前は劉少奇派の中心人物で、復活以降は保守派と見

- なされたが、人治から法治への転換を強調した有力な長老の1人。文革直前の文化革命五人小組の組長となり、文革開始とともに失脚して収監される。79年名誉回復し行政、党組織の要職を歴任した。
- (2) 陸定一：1906年～1996年、江蘇省無錫出身。文革以前の宣伝部門の指導者であり、文化革命五人小組の一員だったが、文革開始とともに毛沢東に反対したと批判され失脚し、78年、名誉回復する。
- (3) 私が延安にいた頃：徐復觀40歳、重慶で軍官訓練団の教官を務めたのち、軍令部の命を受け、延安に赴き国民党の連絡参謀の任務についていた。
- (4) 彭德懷：1898年～1974年、湖南省湘潭出身。解放軍元帥の一人で、大躍進に際し毛沢東を批判して失脚した。文革開始とともに迫害され病死した。78年、名誉を回復し、死後にまとめられた自伝「彭德懷自述」がある。
- (5) 黄克誠：1902年～1986年、湖南省永興出身。軍人、総参謀長。廬山会議で彭德懷反党集団の中心メンバーの一人され、職務を解任された。78年、名誉回復後党職に復帰し著作に「黄克誠自述」「黄克誠回憶録」がある。
- (6) 姚文元：1932年～2005年、浙江省諸暨出身。父は作家の姚蓬子。55年、胡風批判運動中「胡風の文艺思想を論ず」を発表して、当時「解放日報」の総編集であった張春橋の目にとまり、さらに多くの胡風批判をする。後に毛沢東の注意をひくが4人組の一員であり、毛の死後身柄を拘束され、林彪、四人組裁判で懲役20年の判決を受ける。
- (7) 吳晗：1909年～1969年、浙江省義烏出身。歴史学者、北京市副市長。65年戯曲「海瑞免官」が毛沢東を批判したのとして攻撃され、これが文革の発端となる。続いて鄧拓大、廖沫沙と共同で執筆していたコラム「三家村札記」も批判され、迫害されて死去する。79年、名誉回復する。
- (8) 林彪：1906年～1971年、湖北省黄冈出身。軍人、政治家、党副主席兼国防部長。文革の発動と推進に協力して、毛沢東の後継者とされたが、71年、息子が毛の暗殺に失敗したあと国外逃亡を図りモンゴルで墜死した。
- (9) 郭沫若：1892年～1978年、四川省乐山出身。13年、一校予科から六高、九州帝大医科に学ぶ。27年中共入党、国務院副総理、中共中央委員等の要職に就く。文革期には真っ先に自己批判を行ったが、迫害を逃れなかった。「郭沫若全集」38巻がある。
- (10) 初出は、一九六六年八月二十七、二十八日「華僑日報」、この項の訳出は竹内和喜が担当した。